

博報堂生活総合研究所 「BIG PRESENTATION 2015」

# デュアル・マス

## 2つの大衆が共存する時代へ

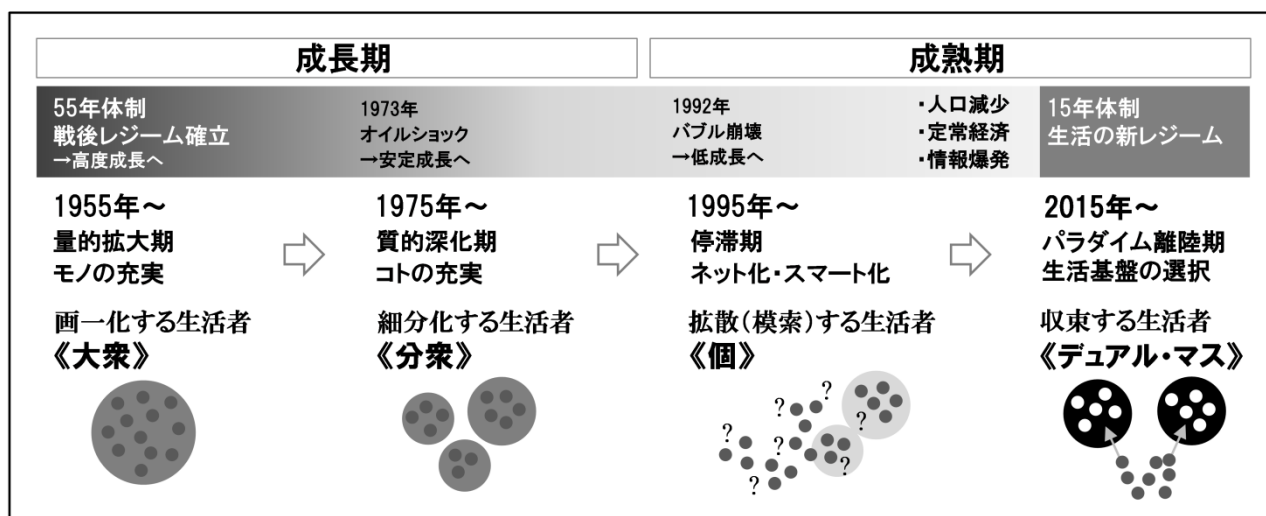
博報堂生活総合研究所は、“大きな変化の時代に、大きな知恵を”という視座から、生活者の未来について提言していく「BIG PRESENTATION」(※)を本年より開始いたします。2015年のタイトルは「デュアル・マス」です。

2015年の日本は戦後70年、戦後レジーム(55年体制)確立から60年という節目を迎えます。人口、経済、情報環境など21世紀の大きな構造変化を受け止め、生活者は自ら主体的に生活の基盤を選択し始めています。生活総研は、生活者が大きく2つの塊に収束していくこの動きを「デュアル・マス」と名付けました。高度経済成長期以降、細分化と拡散を繰り返し、常に分散に向かってきた生活者が、生き方や価値観、行動スタイルとして何を選択していくのか、人々が生み出す新しいパラダイム・シフトについて提言してまいります。

※「BIG PRESENTATION」は博報堂生活総合研究所が毎年発表してきた「生活動力」のコンセプトを踏襲し、より大きな視座で人々の動きを捉え、社会と生活の未来像を提言するプレゼンテーション・コンテンツです。

### ● デュアル・マス誕生の時代背景 — 戦後70年、生活者が生み出す“生活の新レジーム”

22世紀初頭に5千万人以下に減少すると予測される日本の人口。経済の定常化もあり、戦後確立した制度(年金、健康保険)や生活モデル(標準世帯)が根本的に見直されています。こうした社会の大転換を受け、生活者も生活基盤を主体的に選択し始めます。自らの生き方や考え方、行動の仕方がそれぞれ2つの大きな塊に収束。この2つの大衆が共存する時代を「デュアル・マス」と名付けました。



## ● デュアル・マス化が進む 3 つの生活領域

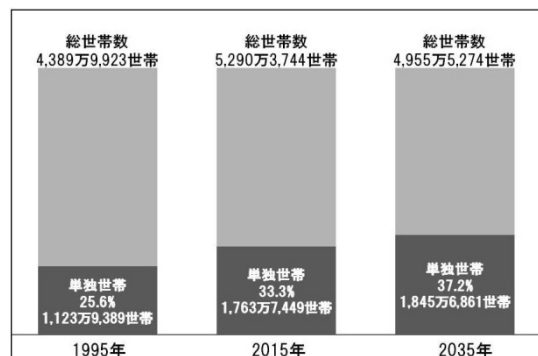
### 【生活単位】

## 独衆と族衆

### — ひとりで生きるか、誰かと生きるか。

単独世帯比率は年々増加し、今や 3 世帯に 1 世帯がひとり暮らし。2035 年には 4 割 (37.2%) に迫ります (グラフ 1)。生涯未婚率も男女ともに増加しており、今やひとりで生きる暮らし (= 独衆) は家族と生きる暮らしと同等の存在感を持つマスの 1 つ。誰かと生きる暮らし (= 族衆) でも、60 歳以上の婚姻数が増加しているように、新しい生き方が現れています。

グラフ 1



出典：1995 年は「国勢調査」、2015 年、2035 年は、国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計」より

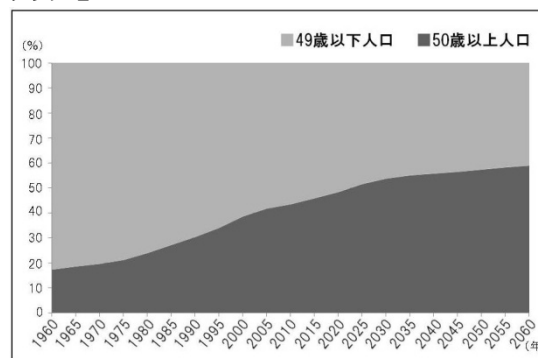
### 【生活価値観】

## AB (アフターバブル) と BB (ビフォーバブル)

### — 経済成長 (バブル) を経験したか、否か。

日本人の平均寿命は 80 歳を超え、2023 年日本の人口は 50 歳以上が過半数へ (グラフ 2)。その時の 50 歳以上が 1973 年以前生まれの人々で、残りの半分が 1974 年以降生まれの人々。生活総研の生活定点点調査でも、今の 40 代以上と 30 代以下の間に最大の価値観の溝 (ギャズム) が、存在していました。

グラフ 2



出典：2010 年までは「国勢調査」、2010 年以降は、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」より

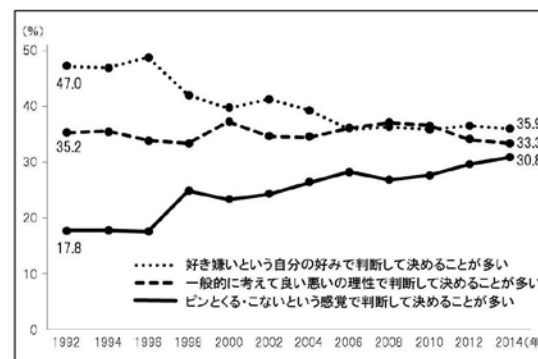
### 【行動スタイル】

## ピン衆とロジ衆

### — ピンで選ぶか、ロジックで選ぶか。

モノ・サービスの選択行動は「好き嫌いで選ぶ」人が減少かつ高齢化し、「ピンと来る来ないで選ぶ」人は倍近くに増加、全年代層に広がるという傾向にあります。また「良い悪いで選ぶ」人はほぼ横ばい (グラフ 3)。ピンで物事を決めるピン衆と、良いか悪いかロジカルに決めるロジ衆。この 2 つに生活者の行動スタイルは収束していくと考えます。

グラフ 3



出典：博報堂生活総合研究所「生活定点点」調査より

## ● デュアル・マスは「共存関係」

2 つのマスの間には、優劣や上下、格差はなく、生活者が主体的に選択した (そして収斂した) という意味で対等であり、互いに容認、尊重し合って共存する関係です。それぞれのボリュームに差があったとしても、存在感として同格で批判し合ったり、敵対したりもしません。

また、1 つのマスを選択した生活者が、もう 1 つへのマスへ変更することも可能。これまで独衆だったが何かのきっかけで族衆になる人、AB (アフターバブル) 生まれでも BB (ビフォーバブル) 的価値観へシフトする人、いつもはピンで選べけれど、ある商品だけはロジカルに購入する人などなど、2 つのマスの間の行き来は自由で、どちらか一方の生き方や考え方に縛られてしまうわけではありません。